

問屋場

西新石丁

東八傳馬丁

北本獅町

日光道ナリ

桂坂

宇都宮の 旧跡

三馬丁

本台所

傳馬町

宇都宮市教育委員会



表 紙

『宇陽略記』より

宇都宮市大通り5-2-10

高橋節子氏所蔵

文化財シリーズ第10号

宇都宮の
田跡

平成元年

宇都宮市教育委員会

宇都宮の旧跡正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
2	5	土地には	土地は	40	5	寛永8年	寛文8年
3	24	時間的や外の	時間をはじめ	40	7	二十七日忌	三七日忌
4	26	功防戦	攻防戦	41	2	間垣	曲垣
6	3	(1333年~)	(1334年~)	41	23	奥平	奥平
11	12	(比)かんえい	(比)かんえん	41	24	(比)まさあき	(比)まさあき
12	5	寺であったもと	寺であったとむ	41	28	奥平	奥平
14	10	(比)たした	(比)たげ	42	17	藩主	藩士
16	9	享禄2年(1592)	享禄2年(1599)	44	13	文明2年(1487)	文明2年(1470)
16	36	しかし	(削除)	46	14	(考古)	(考古)
17	23	おしどりの	おしどりに	47	8	考兵衛	孝兵衛
18	1	(比)まがぶつ	(比)まがいぶつ	47	9	考兵衛	孝兵衛
20	17	寛永18年(1841)	寛永18年(1841)	47	33	正元元年(1256)	正元元年(1259)
20	21	(~1817)	(~1815)	49	11	元禄12年(1649)	元禄12年(1699)
27	19	船は	船	49	14	宝永元年	宝永7年
29	6	センドウヤ	センドウヤ	50	15	泰堂	素堂
30	5	嘉永5年(1851)	嘉永5年(1852)	50	18	文久4年(1861)	文久4年(1864)
30	19	これが	(削除)	50	25	明治39年(1905)	明治39年(1906)
31	1	安政2年	安政3年	51	23	(比)はくろう	(比)ぼくろう
31	18	宇都宮まで	宇都宮で	53	16	保延3年	保延元年
31	31	天平13年(796)	天平13年(741)	53	26	安永3年(1775)	安永3年(1774)
33	7	用いされます	用いられる	55	22	文化10年(1872)	文化10年(1813)
35	2	文化5年	文政5年	60	32	(比)いせんすうもん	(比)いせんすもん
36	11	十二代	十三代	73	9	(比)ころへい	(比)ころへい
38	4	元治元年(1863)	元治元年(1864)	73	9	康平6年(1062)	康平6年(1063)
39	21	元和8年	寛文8年	80	8	世界大戦	世界大戦後
39	26	寛文8年(1608)	寛文8年(1668)	80	16	大正元年	大正14年
39	26	二十七日忌	三七日忌	88	21	熱木町	贅木町
39	29	自刀	自刃	91	9	国恩寺(大明神)	(大明神)を削除

序 文

毎年、号を重ねてまいりました「宇都宮市の文化財シリーズ」も、本号をもちまして第10号となりました。本号は、私たちの身近な地域の歴史をとりあげた「宇都宮の旧跡」です。

「宇都宮の民俗」から始まったこのシリーズは、民家・芸能・祭り・石碑・名木・民話・古道・絵馬と続いてまいりましたが、ここでもう一度、自分たちが住んでいる土地にまつわる歴史や伝承を取り上げて、その地域に住む私たちがその土地に愛着を感じ、誇りをもてるように、という願いをこめて「旧跡」という本にまとめあげました。

私たちが何気なく生活している土地には、例外なく長い長い歴史が刻まれており、その歴史の上に現在の生活が築かれています。『温故知新』という言葉がありますが、古い歴史を知ってこそ、より良い歴史を築きあげ、幸せな生活を営むことができるというものです。

社会生活の向上や自由時間の増大などによって、市民の皆さんの知的活動や芸術・文化活動への要求は高まり、また、地域では祭りをはじめとする伝統芸能が再認識され、その歴史や風土に根ざした文化を見直す気運が高まりつつある今日ではありますが、一方では急激な都市化の進展や社会情勢の変化により、自分たちの住む土地にまつわる旧跡などが忘れ去られ、貴重な文化財が失われつつあるのも事実です。

このような中での本シリーズの発刊ですので、多くの方々のお目にとまり、地域の歴史の見直しにつながれば幸いに存じます。ひいては宇都宮市全体に対する愛着を寄せていただくよう心より願う次第です。

最後になりましたが、今回の調査及び本冊子の刊行にあたり、調査等に御協力いただきました宇都宮市文化財調査員の方々、また調査の際に御協力くださいました多くの方々に、心から感謝の意を表します。

平成元年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 藤 田 昌 平

目 次

序 文	
まえがき	1
I 『宇都宮の旧跡』の調査について	2
II 宇都宮の旧跡	4
1 古戦場をたずねて	4
2 政治に関する旧跡	8
3 寺院の跡をたずねて(廃寺)	9
4 塚(土を盛り上げて)	13
5 磨崖仏をたずねて	18
6 宇都宮藩の藩校「修道館」	20
7 寺子屋や塾の跡	21
8 街道に残る一里塚	23
9 大名の宿、本陣・脇本陣をたずねて	25
10 河川交通の荷上げ場、河岸	27
11 用水路や用水堰	29
12 刀を作った鍛冶場の跡	31
13 鉱山の跡と石を使った建物	31
14 明治の工場の跡地	34
15 先人の墓所をたずねて	35
16 さまざまな碑	55
17 庭園の跡	59
18 名木・名水	60
19 城の跡	64
20 その他の旧跡	75
III 参考資料	84
1 宇都宮の旧跡地図	84
2 書籍にある宇都宮の旧跡	87
IV 索引	103
あとがき	106

まえがき

本冊子は、昭和60年に宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け、市文化財調査員活動の一環として実施した「旧跡調査(課題別文化財一斉調査)」の結果をもとにまとめたものです。

同調査は、市内全域を対象として実施され、全部で64件の報告がありました。本冊子は、これに事務局(市教育委員会社会教育課)の職員が調査したものも加えて掲載いたしました。

調査員によって報告された旧跡や、事務局で調査した旧跡につきましては、巻末に市内の所在地図と共に一覧表にして掲示してありますので御参考になれば幸いです。

なお、この「旧跡調査」は以下の組織で調査をしましたが、現地調査において多くの方々の御協力を仰ぎました。

●宇都宮市文化財保護審議委員会委員

雨宮義人(委員長) 岩崎良能(副委員長) 阿久津 浩(委員)^{S63.9} 退任
大金宜亮(委員) 戸田博亘(委員) ○富 祐次(委員)
橋本澄朗(委員) 堀 静夫(委員) 森谷 憲(委員)
渡辺安友(委員) 小林幹夫(委員)^{S63.10} 新任

●宇都宮市文化財調査員

黒川孝三(一条)^{S63.9} 退任 塚田宗雄(陽北) 酒井光一(旭)
内藤二郎(陽南) 石川秀男(陽西) 高藤常松(星が丘)
松本文一郎(陽東) 平塚良雄(豊郷) 桑川弘明(宮の原)
菊池正仁(平石) 直井 学(清原) 増潤 藤四郎(横川)
板寄悦男(瑞穂野) 小林哲夫(泉が丘) 小塚 博(国本)
高山伝治(城山) 福田 操(富屋) 阿久津義正(篠井)
松本笑悦(姿川) 小島豪市郎(雀宮) 河合芳幸(一条)^{S63.10} 新任

() 内は調査員の担当地区

●宇都宮市教育委員会社会教育課職員

塚田 隆一(社会教育課長) 河越 昌可(社会教育課長補佐) ○小林 錦一(文化振興係長)
○定岡 明義(文化振興係) ○手塚 英男(文化振興係) ○桑木 誠(文化振興係)
○小松 俊雄(文化振興係) ○赤石澤 亮(文化振興係) ○大塚 雅之(文化振興係)
○神野 安伸(文化振興係) ○今平 利幸(文化振興係) ○森本 久夫(文化振興係嘱託)
小林 祐子(文化振興係嘱託) 間彦 克子(文化振興係嘱託) ○印=企画編集(◎印=主任)

I 『宇都宮の旧跡』の調査について

本冊子は、宇都宮市文化財調査活動の一環として実施した「昭和60年度課題別一斉調査」のテーマ『宇都宮の旧跡』の結果をまとめたものです。

1 目的

私たちが普段生活している土地には、例外なく長い歴史の上に成立しています。しかし地元の歴史というと、どうしても特定の人物や大きなできごとを考えてしまい、身近な歴史にはなかなか目が向かないのが実情です。

また、近年は社会情勢の急速な変化や、情報量の増大のために、身近な歴史そのものが意識されなくなったり、ひいては忘れ去られようとさえしているのが現状です。

そこで、市内全域にわたって旧跡調査を実施し、身近な歴史に焦点を当ててみました。

2 調査対象

『旧跡』の調査対象は、国の史跡指定基準を参考にして教育委員会事務局で以下の様な項目を設けて調査いたしました。

1 古戦場その他政治に関する旧跡

(1)古戦場 (2)政治関係の旧跡

2 社寺の跡または旧境内、塚、磨崖仏、堂宇

(1)社寺の跡 (2)塚 (3)磨崖仏 (4)堂宇

3 藩校、私塾、文庫その他教育学芸に関する旧跡

(1)藩校 (2)寺子屋 (3)その他

4 産業、交通、土木に関する旧跡

(1)一里塚 (2)並木街道 (3)本陣・脇本陣跡 (4)問屋跡 (5)河岸跡 (6)用水堰
(7)窯跡 (8)鍛冶場跡 (9)鉱山跡 (10)産業関係建物跡

5 墓、石碑関係

(1)墓 (2)石碑 (3)古墳

6 旧宅地、園地、井泉、樹石および特に由緒のある地域

(1)旧宅地 (2)井泉 (3)樹木 (4)その他

7 信仰関係他

8 城跡、屋敷跡

9 その他

3 調査方法

(1) 調査

調査は直接現地に行って聞き取り調査を中心に行いました。また、写真撮影もできるだけ実施いたしました。

(2) まとめ

「旧跡調査票」に調査結果を記録し、写真を添付しました。

(3) 調査地区

調査地区は宇都宮市全域で行いましたが、各調査員は原則として、担当地内の調査を行いました。

(4) 調査結果

昭和63年3月までに調査を実施した旧跡の件数は、232件に達しました。そのうち161件を今回の『宇都宮の旧跡』の中に掲載いたしました。

今回の調査は、宇都宮市文化財調査員から報告のあったものを中心として、残

りは事務局で行いましたが、事務局は「宇都宮市史 全8巻」、宇都宮市60周年誌」、田代善吉著「宇都宮史」等4冊の記載の中から旧跡に関するもののリストを作成し、このリストにしたがって補足調査を実施しました。なお、このリストは巻末の参考資料編に載せておきましたので、御参考になれば幸いです。

したがいまして、今回の調査では時間的や外の様々な制約によりこのリスト全部を調査するというわけにはいきませんでした。また、調査物件に関しましても、全てを本報告書の中を書くわけにはいきませんでしたので、御了承いただきたく思います。

一つの旧跡には、年代や内容に関しまして諸説あり、それが問題となっているものもあります。このような場合には原則として「宇都宮市史」の記載を採用させていただきましたので、この点も併せて御了承いただきたく重ねてお願い申し上げます。

(5) 本冊子の見方

本文中にある〔 〕で囲まれた数字は、巻末資料の宇都宮の旧跡地図の数字と一致します。現在の位置との比較や、旧跡を訪れる場合などに活用してください。ただし、この位置のうちいくつかは、推定の位置や大まかな位置としてとらえてあります。また、広範囲の旧跡の場合には、範囲の中の一点を指して全体を示すこととします。

宇 都 宮 の 旧 跡 調 査 用 紙		No.	
旧跡名		所在地	
(位置略図)		(解説)	
(写真)			

Ⅱ 宇都宮の旧跡

1 古戦場をたずねて

古戦場とは、昔ここで戦いがあった、またはあったことが伝えられている場所のことをいいます。ここでは戊辰戦争を含む江戸時代以前の古戦場を掲げておきます。

● 裳原古戦場

平安時代から戦国時代まで、宇都宮の地を支配していた宇都宮氏の第11代城主である宇都宮基綱が、小山義政と戦って戦死をしたといわれている場所です。時に康暦2（天授6）年（1380）のことでした。

この裳原の古戦場といわれているところは何か所かありますが、そのうちの 하나가、現茂原2丁目の国道4号線あたりといわれています。

〔1-①〕 現在は車の往来も多く、新幹線の架橋などもあり当時を偲ばせるものは全くありません。

なお、茂原2丁目以外にも、現宇都宮自衛隊宇都宮南駐屯地（現・茂原1丁目）南側のくぼ地だという話や、石橋町の鞘堂付近だという話もあります。石橋町の鞘堂という地名は、裳原の戦いの時に戦死した者たちの刀の鞘を塚にしたところから起ったという話もあります。



伝 裳原古戦場（現・茂原2丁目付近）

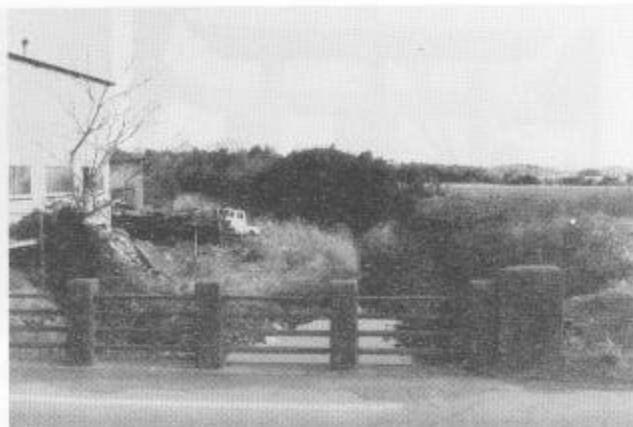
● 幕田古戦場（戊辰戦争）

江戸幕府が終わりを告げ、明治新政府に変わろうという時、新政府を認めず幕府体制を守ろうとする勢力と、明治新政府の間で武力衝突が起きました。これが戊辰戦争（戊辰の役）といわれるもので、慶応4年（1868）のことです。この戦いは宇都宮城をめぐる攻防戦も行われたので宇都宮の街はほとんど焼けてしまいました。当然市内の数多くの場所で戦いが行われましたが、ここでは幕田の戦いと六道の戦いの2つのみを記載します。

慶応4年4月19日、宇都宮城は幕府方大鳥圭介の前軍としての土方歳三の軍と会津藩士秋月登之助らの軍によって落城してしまいました。このころ宇都宮藩を応援するための因幡（現・鳥取県）、土佐（現・高知県）藩らの新政府軍は、まだ壬生城にとどまっていた。一方壬生城を攻めようとしていた幕府軍は、幕田（現・幕田町）〔1-②〕に陣をはったところから、安塚・幕田付近で戦いが起きました。4月21日の夜から22日にかけてこの雨中の激戦で、死傷者は新政府軍・幕府軍を合わせて100名を越えるものでした。なお、この戦いは新政府軍の優勢のうちに終了し、幕府軍は幕田から西川田方面へ退却しました。



幕府軍戦死者の墓〔1-3〕
(現・幕田町)



幕府軍が退却した幕田町の集落を望む〔1-4〕
(姿川にかかる栃木街道の大森橋より東方を見る)

●六道古戦場

落城した宇都宮城を奪いかえすために、新政府は第二・第三救援隊総勢850人程度を派遣しました。新政府軍と幕府軍は鶴田(現・鶴田町)や滝の権現〔1-5〕(現・滝谷町)などで撃ち合いになった後、六

道口〔1-6〕で大激戦となりました。戦いは4月23日の早朝からはじまり午後3時ごろ幕府軍は新政府軍の攻撃に耐えきれず、宇都宮城を放棄し、二荒山神社から八幡山・徳次郎方面へと退却していきました。この戦いで命を落とした幕府軍の戦死者(会津藩中心)が六道の交差点の角に



六道にある戊辰戦争戦死者の墓(現・西原1丁目)

祀られ、近所の方の手できれいに手入れされており、現在でも多くの方がお参りしていくそうです。一方新政府軍として命を落とした人たちは、報恩寺〔1-7〕や光琳寺〔1-8〕などの多くの寺に祀られています。



報恩寺（現・西原1丁目）官修墓地



光琳寺（現・西原1丁目）官修墓地

（注…官修墓地とは、新政府軍として戦死した者の墓のことをいいます。官修墳墓ともいいます。）

もっと知りたい人のために

● 裳原の戦い

鎌倉時代が終わり、室町時代へと移るころの話です。当時は建武の新政（1333年～）に失敗した後醍醐天皇は1336年に吉野（現・和歌山県）に移りました。一方、京都にいた足利尊氏が朝廷をたてたため、南朝（吉野）と北朝（京都）の天皇が同時にいる世となってしまいました。この争いは全国的に広がりあちらこちらで南朝方と北朝方の二つに分かれて争いが繰り広げられました。当時、宇都宮の第9代城主であった公綱は北朝方について、南朝方の楠木正成らと戦い勇名を全国に轟かせました。しかし、北條氏が滅亡すると公綱は逆に南朝方につき、足利尊氏を破ったりもしていました。公綱の子氏綱は、父が京都で戦っている時わずか13才で城主となり、有力家臣である芳賀禪可清原高名とともに宇都宮の地を取り仕切っていました。氏綱は父と違い、北朝方に味方をしたため、父と子の争いで宇都宮家は分裂状態に陥りました。そのような中で氏綱は上野、越後国の守護職となるほど、着実に関東一円に勢力を広めていきましたが、やはり関東で勢力を伸ばそうとしていた上杉憲顕との戦いに破れるとだんだんと勢力も衰えていき、上杉氏が室町幕府の関東管領として関東を取り仕切るようになりました。

そのような中で小山周辺を支配していた小山氏は、勢力を伸ばそうとするうちに宇都宮氏との争いが起きてきました。康暦2（天授6）年（1380）の5月16日にととう宇都宮氏と小山氏の争いが表面化し、裳原の戦いとなってあらわれてしまいました。この戦いで小山方は大円入道親子をはじめ親戚・家臣等200人ばかりが、宇都宮方は氏綱の子である11代城主基綱をはじめ芳賀一族等の家臣80人あまりが戦死するという激しい戦いでした。この戦いをきっかけとして鎌倉公方足利氏満によって、小山氏攻撃（3回にわたる）が行われた小山義政の乱がはじまったのでした。この乱は17年の長期にもわたり、結果として小山氏は滅亡してしまいました。

